

# 新井白石と西洋形而上学

内山 善一

## 一 白石の詩語

新井白石がイタリア人宣教師ヨハン・バッチヌス夕、シドナを通じて知り得たところによって西政の学向を評して「これにて知りぬ、彼等の学の如きはたゞ其形を器とに精しき事を、所謂形而下なるもののみを知りて、形而上なるものはいまだあぶかり聞かず、さらば天地のごときも、これを造れるものありといふ事、怪しむにはたらず」(西洋紀原上、岩波文庫本二四頁)と断じ去つたのは有名であるが、まず、白石が形而上、形而下という用語を用いている点に少なからず興味が引かれる。それは現在我々の間ではこの語を、ギリシアの古代哲学者アリストテレスの死後その著述を整理したロドスのアンドロニクスがつけた分類名、すなわち、自然現象の研究についての部分をフィジカ(物理学)と名づけその他のものをそれに続くもののでメタ・タ・フィジイカ *Meta*

*ta physika* (物理学の後)と名付けたのに始まり、前者を形而下学、後者を形而上学と称しているのである。白石の用語がほど同意味に受取られるからである。

たゞ右の白石の言葉を「西政には形而下学はあるが形而上学に相当するものは皆無」と感ちがしいと言と解してその短見を指摘し、西政の中古以来の形而上学的知識を見落した彼こそ、彼自身の言葉をもつて評し返さるべきだとの見方がとられ、更に或は、当時一般日本人は形而上学的抽象理論に不慣れであつたために到底西政形而上学的知識の理解を望むのは無理で、キリシタン三百年の布教に当つても、情熱的な信仰に燃えて生命を賭しての殉教者は輩出したけれども、それも要するに在求の神道・仏教によつて養われた信仰にハイカラな西政的衣装が着せられたにすぎぬもので、西政で理解された通りのキリス教の思想信仰と同質の域に迄は達し得なかつた、いわば、日本風キリスト教として低下し変質した安価な

似て非な信仰しか持ち得なかつたのではないか、といふような説をなす者も見られる処である。勿論輕々に断すべきではないが、ともかく白石の西政思想に對する批判の態裏と内容、また當時の日本人の形而上学的理論に對する理解程度如何を考へることは、たゞ當時の思想信仰史の現状を顧りみるためだけでなく、現在のまに將來の日本人的思想信仰の展轉のためにも、重要な反省の資料を得られることと思ふ。

## 二 白石の批判の意味

白石の言葉は、要するに西洋の學問は盛であるが結局、形器の知にすぎず、これをもって直に宇宙の根本原理を思索探究する形而上的のものとはいわれぬといふ意味に解すべきものと思われる。従つて唯、単に形而上學無しとみたというのではなく、中世以来西政宗教の基本思想を成す有神論の思考（正に彼等の向に形而上學の到達点とされる）ですらも決して形而上的ならずとみたのであり、むしろ形而下的な考へ方の延長に過ぎぬとして輕蔑したものとするべきだと思ふ外ない。したがつて、たゞ西洋形而上學の有無に對しての白石の短見を云々するだけでは足りない。

果して西洋の形而下學思想より帰結された當時の形而

上學的結論が、白石の評したように、結局形而下的思想の單なる應用にすぎないか、或は人間工作的成果からの考察の結果に過ぎなかつたのか或は更に眞の形而上學的原理追求の思考が如何にあるべきかに就いての論究が試みられねばならぬと思ふ。換言すれば白石は彼自身の所謂形而上的的思考と、西洋の世界觀的思考との同の対決を提起したものと見られねばならぬ。

更に突込んでいへば、後代の蘭學者が當時の西政自然科学的知識に基付いて有料哲學を容認し更にキリスト教神學へと導かれる所謂「本然の學」(それは蘭學の名の下に実は當時密かに中國より密輸されて邦人學者の眼にふれ、珍重されに中國の明、清天主教宣教師の手になる漢訳書によつて導入されたもので、蘭書より読み易いのでそれに啓蒙された學者が、天主教書より得た処を蘭書より得たものの如く偽装した)によつてキリシタン邪教親が次々に除かれて、近代日本への胸眼に進んだのに比して、一見、白石は相変らず旧弊存朱子學的世界觀に止つての西洋及びキリシタン蔑視を出でないように見えるのであるが、我々は、むしろ彼白石の形而上學論義は、それを乗り越えて、現代我々が接している所謂現代思潮の一部が示す方向、中世紀以来の形而上學的思想に抵抗する唯物論的、一元論的思想を示唆しているような感じを受ける。換言すれば、彼白石が世紀を越えて現代に迄

生きのびているのか、それとも現代の知識人の知性がまた、白石時代の限界より脱出し得めのか、とまどいたくなるほどである。

### 三「白石と」和魂洋才」

白石は西洋の学の如きは単に形器の学にすぎず、東洋の精神的な学文に比してとるに足らぬものであるとしながら、後世に所謂「和魂洋才」として文明採取の言葉葉になつた思想の先唱者とみなされるほど、西洋形而下学重視への強い傾向を見せたことは、後世史家の等しく認めるところであり、その故に彼が洋学南啓の始祖とみられることは否み得ない。それについては、今并頭初の「日本正史（オニニ四号）」所載の宮崎教授の御論究「新井白石と蘭学」に於いて、佐藤昌介氏「新井白石の西洋學術観批判の向題点」について述べられた処によつても、よし白石をもって西洋學術思想（信奉者として）の導入者とはいえずとも、広義の蘭学重視・洋学動興の思想的準備をしたとみる点で本邦蘭國後の洋学の陶創者と見得ることの再確認と、又蘭学者達の先達としての史蹟が如何に強くなかつたかに就いて今更、深い感銘を受けたのであるが、勿論それは自然科学的な面であるが、同時に白石の形而上学観、有神論批判は、あすかの言葉ながら

決して見逃し得ぬひらめきがその内に感取される。

後代の殊に明治以後の和魂洋才主義に至つては、西洋の自然科学の発展に驚嘆しその模取に熱中しながら、一方で我國民精神とか神話的伝承とかを温存する必要上、我方の優位を強調するに努めた一種の盲目的独尊思想が誇張された神國主義であり、遂には世界を敵とする大戦敢闘に突入り大敗を喫する結果をまねくに至つた。和魂洋才の語源に就ては、菅原直真の著、或は中世末期の偽作ともいわれる「菅家遺談」に「和魂漢才神國一世玄妙云々」の言がある処からというが、和魂は我國固有の民族精神の自覚された表現とされ、大和魂大和心等といわれる心情を指し漢才（からざえ）は、これに對し当時の外國（朝鮮・中国）思想により啓発された学文才能を指す、当初は和魂をば外来の学文知識をもつて活用することを意味し、しかも漢才は決して形而下学を指さず、むしろ形而上的原理考察の面を重じられた、後に漢学に国学が及ぼす時代になると漢才は却つて無用のさかしら心として排撃されるようになつたが、ともかく、いかに國外で普遍的眞実として認識される学的知識であるうとも、所謂、大和心、日本の神話伝承に反するものは一切採るべからざるものとされた。白石の様な儒学者にあつては、勿論偏狹な国学者流の態度はとる処とならず、むしろ儒学的見地中に含まれる普遍的眞理は、これを和魂にその

教養として撰取するにはゞからなかつたわけであるが、後世和魂漢才の語に代つて和魂洋才の語が行われるに至つては、形而上的の方面には、むしろ故意に眼を閉じて、凡々洋才といへば専ら形而下学的知識技術のみを意味するようになった。即ち、それがキリスト教肯定に通ずる恐れある点を嫌つたためである。

今、もし我々が、白石の見解の下に見た和魂漢才的に行き方に準じて進むとしたらどうあるべきであるか。和魂洋才の真意は、實に和魂に配するに形而下学的知識だけでなく、形而上学的知識も、取るべきものは取ると考へらるべきで、それこそ備見なき和魂育成の途である。

#### 四 白石の逆説

西洋紀聞を見ると、彼一流の興味ある表現に接する。

彼は表面、外國を夷狄としてあつかいながら、内裏に於いては傳れた文明國と認め、シドナ神父にのいても、或は蕃夷と称しつゝも多くの場合、單に「彼」「彼の人」と記し、更に「羅馬人」「大西人」といつてむしろ敬意を示している。「彼の方の字の如きはたゞその形と器とにくわしき」のみであると大に輕蔑した如く表現し乍ら、「天文地理の事に至つては企て及ぶべしともおぼえずへ

紀聞上卷」と大にその形器の知識についてすべれ左点を價揚し、さらに倫理的の面についてすらも「其人（シドナ）蕃夷にして其□蕃夷なれば直徳のごときは論ずるに及ばず」といふながら、直に續けて「されど其志の堅きありさまをみるに彼が爲に心を動かさざること能わす」と嘆じ（白石「羅馬人処置叢議」）、或はまたシドナ師の言葉として「すべて人の、まことなきほどの恥辱は候はず、まして妄語の事に至ては我法の大戒に候云々」といつたことを記し（紀聞上卷）、また前掲のシドナ字識のことを讀した後、直に續けて「まに謹愼にしてよく小善にも服する所ありき」と、その温情あり儀礼正しい点にも感嘆している。更に西政キリスト教布教の意義目的に就ても「其法を修し候ものは十戒を持ち諸悪を断じ天堂に生ぞうけて地獄の苦しみをまぬかれ候事を求め候」と相聞え候」としてその勸善を目的とすること、又、「彼法之師諸國に渡り候而其法をひろめ候事、これ耶穌の教と相聞え候其故は天主は天地萬物の父母にて一世界の人、皆これ兄弟にて候、父母の子を見候事は男女少長を忽らばず皆々同じ心にて父母の心を以て其子の心とする時は兄弟の向は相したしむ相愛すべき事に而候又子を愛しなほ子ををしゆる父母の心にて候、其父母の心を其子の心とする時は兄弟の向は相やしなほ相をしゆべき事すなほは天主の心天主の法にて候との義と相聞え候」と

記して、人類愛による布教の所以を説いている次で、その倫理観、宗教観の文化度の高いことをも十分認められた表現をとっている。白石においては結局「洋魂」の容るべからざる根柢は、各国民族伝統の相違にあり、我回では、我回の徳教がある故に他回の徳教は行われ得べきでない。どちらが文化的に優秀かについては論外として、<sup>11</sup>と見る態度に外ならず、彼はシドナ神文を送還するのを上策として建言した文章の中に「汝が訴うる所の事（キリスト教布教）その謂あり、汝が法とする所その理ありとも、今はは、我祖宗の法をやぶりて汝蕃夷の法を行ふ事をゆるすべからず」との理由をあげべきだと述べている。我が方の信念としては免に角、回外に向つての発言としては、これ以上に我法の至上性を主張し得ぬことを、了解していたことが察せられる。

### 五 白石の原理

しかも白石が信奉した徳教ならびに形而上的思考は、決して我回独自の單なる伝承神話や政治権力の無条件な固守ではなく、むしろ彼なりに理解した宇宙学的東洋哲学としての儒教思想を容れた知識人としての思考によつたといふ点こそ注意されるべきであるが、更に、西政の有神思想を批判するに当つては、それが儒学的見解と異なる

からとの点よりも、有神思想自体の内に彼の所謂形而下的思考適用の矛盾をみる点に重きを置いたと見るべきであつて、ここにこそ今日我々が彼白石と或は響鳴し、或は対決する重要な焦点があるといえる。

即ち白石は西政の自然科学的東証、技術の精密さ正確さに感嘆しつつも、それを、如何にして形而上的原理に結びつけ得べきかの点に、批判の眼をむけたと見るべきだと思ふ。それは一応人間の工作による因果現象を例にとつて、直に宇宙創成の立証とするような幼稚な結論を引出すことの非を指摘しただけに見えるが、我々は彼の批判の眼を追うとき、当然さらに高次の推理点に到達する。それは物理的な現象・因果關係とて、一俚の自然的機械的法則性をもつた必然的の変移を意味するものとして理解されるのに、その創始を偶然的な自由意志の工作（神的創造）に求めるのはいかにも不合理ではないかといふ点、又、物的因果關係は必ず物的原因なしには起り得ないのに、物的世界に純靈的原因を想定するのは、物的因果關係よりの推理としての域を越えた論理學上に所謂因性濫用或は論旨転用の詭辨ではないか、といふ反論を含んでいる。さらに、白石の「世界に原因を要するといふならば、その原因たる天主にもまた原因を要する筈であり、もし天主自ら生じ得るならば、世界もまた自ら生じ得べきではないか」といふ論議の中には、

勿論、東洋人的な、天地を生んじ創祖神もまた自生したとする伝説的背景をにおわせているが、同時に、先に進んで、神が自から生じた者、即ち自己原因

による存在であるとしたなり、未だ生じなかつた以前に、どうして自身を存在せしめ得たかという点の批判考察をも、うながすものと見られる。(自己原因と自性存在者との相置)

## 六 現代人と白石

かような諸点に於いて白石の批判を多めるとき、我々は現在の我々の向に於いての所謂合理主義、主知主義、実証主義等の立場からの形而上学批判乃至宗教思想批判に通ずるものがあるといえ得いであらうかと思ふ。

ところで、形而上とか形而下とか、猶神的とか宗教的とかいふような用語が、次々に乱用されていくうちに人々に意味を異にして受取りられ、この種の論議が不確定に取扱われ、明確な論断に達しないまゝ不徹底にさしおかれ勝に存る。故に才一にその字義を正視する必要があると同時に、白石思想の現代知識人の思想との近似性を見直しながら、現代知識に於いて反省すべき点なきかに言及して見届く考ふるものである。白石の用いた形而上、形而下の語義は前述の通り正にアリストテレーヌスコ

ラ哲学的の意味に用いられると解される。後世しばしば多義にとられ、形而下を、物質的、感覺的と見る点から物慾的・肉慾的の意にとつたり、形而上的の意を直に精神的、靈的というような意にとる人もあり、或は形而下・形而上を具體的と抽象的との対比とする場合にも、具體的即ち實際的・現実的、抽象的即ち空想的・非現実的の意と同視する人もある始末で、形而下、形而上の対比をかくように転意し、はては実証的と空想的との対比の様に表現されたのでは全く論外という外ない。

白石は形而上の意をあくまで形而下即ち物理的自然的知識から当然帰納さるべき本体的原理と視、さらにその原理的本体(大極、無極)と考えられる根元より派生するところと考えられる道理によって帰結される処(天命、天理)によって現実の世界の存在も人間の倫理的原則も一切が説明さるべきだといふ態度から成る朱子学的世界観に立つ。正に現在の我々から見る限り、その形而下的知識から帰納される知識が不完全であり、またそれを補うために当時常にとられた先驗的<sup>ア priori</sup>な概念論から得られた世界観に大きな欠陥が認められるとはいへ、その学的態度としては、むしろ、アリストテレーヌスコラ学にも通ずる感がある。「大学」の所謂「正心、誠意、致知、格物の方法」が正しく、心理的、倫理的、且の主知的、実証的乃至、實在論的行き方を示す限り、論理的、本体

学的、客観主義的な中世哲学と軌を一にするかを考えられる。たゞ白石は、西欧の学的方法が、かような原理的追求に当って、現象界の実証的知識を、そのまゝ、任意に無用意に形而上的事項に適用して、物的因果論や人意的制作行為と全く同様のものとして宇宙創成の説明に当てていると受取つたので、「天地もこれを造れる者あり」ということ怪しむにはたらず」として、その幼稚さをあざわらう結論を下したのだと思つた。

## 七、創造の通俗的観念と信仰

形而上学的に結論し、認識する「神の世界創造」の意味を、假りに幼稚な、神人的造物者の工作とみる程度に理解したとしても、信仰心理上その実践信心としてゐるとき直に誤りとはいへない。むしろ人性一般に具有される宗教心に基付いて、天地の創造主であり主宰者である神を認めて帰依するとき、その信仰、認識がたとえ幼稚に止るとも、その信心の誠意は何等、擧色のないもので、その説明が理智的に不完全であつても、その価値は変らない筈である。従つて假りに、日本陶教当時のキリシタンが、テウス信仰の觀念を在まの神仏信心的な基台に置いて理解してはにすぎぬとしても、その知識の欠陥のために信仰の純粹な決して損われず、やはり眞の正しい

キリシタン信仰に外ならぬといえるであらう。

それはそれとして、当時のキリシタン布教の盛時にいて、神学、哲学的に説明された教理観念といえども、むしろ通俗的な説明にすぎぬ場合が多かつたことは否まれないと思う。たゞ、当時としては相当綿密な説明もなされていたことは、例の「妙貞問答」や「ひですの導師」(ヘルイス・テ、メラナタの名著の抄訳のローマ字本)や当時の日本神学校等のテキストとして編まれ、我國に布教したイエズス会士中、最も啓蒙的左頭の持主として贊えられるアレキサンドロ、ワリニヤーニ師の「日本のカテキスム」(ラテン語本現存、近時ポルトガルのユボラ図書館で発見された昇風の中張紙に用いられた破古紙に含まれた古文書中にその日本語訳断片)の渾老沢教授等の研究によれば、相当体系立つた詳細な論述が見られ、日本神話や仏教的汎神論に対する形而上学的な批判や交論が見られるが、併し多くの場合、創造を論ずるに際しては、被造世界の依存性(自性による存在と認められ得ない性質)についての形而上学的原理の説明よりも、むしろ神の自由意志、或は慈悲とか愛とかによる創造動機が強調され、また神の位格性の表現に当つても、神の知恵や神の能力の説明に於いてその原理的絶対性についてよりも、何か生殺与奪の権能ある偉大な巨人的最高専制君主の意向を伝えるような印象を与える面が強調され、

従つて、白石の批判に見るようなものにしか解されぬ結果を招く傾きにあったことも舌又得ない。勿論この通俗的説明自体を信仰上より見て非難さるべきものとはならぬので、今なお一般的に用いられている筈であるが、その様な説明だけではあきたらぬ者の出ることもまた當然で、それに対して広く充實納得のいく説明が与えられず、甚だしい場合には自他共に不信心或は反神行爲の如くに思ひ過し、遂には一般信心者から白眼視されるに至る。

近代思想に立つて中世紀以来の考え方を批判する人達が、これを問題視せぬ筈がない。しかも形而下学の近代化と共に一層、その傾向を強め、性急に進み、けては中世以来の形而上学の形態自体に就いて、新しい形而下学に対応させ得る道はないものとして捨て去らうとするに至る。その場合、古い形而上学に対する批判の根柢として提出されるのが、あたかも白石の提示した批判根柢と軌を一にするかと思われる。換言すれば白石の洋学に就いての認識と批判は、彼の洋学導入の創始者としての地位を示すと同時に、それだけに止まらず、むしろ彼の後輩である南学者群をすら乗り越えて、現代の我々の前に我々と対等の論題を共通し得るものと思われるのである。我々が白石の批判の現代的意味を評価することの重要性を感じるのは、現代人が現在思惟している問題をとり、

彼の眼を通じて、もう一度見直して再出発の要があると  
思ふ故である。

### 八 白石の造物の理と上帝思想

白石は有神論的神観念を評して、「其天主と申すものは道家に上帝と申すものに似候て其修行の法に同じく想見を候事」と記し、更に、「堯舜周孔の書に上帝と申す事有之候は、天地造物の理をさし候へば、彼法並に道家の説の如く、その神人天上花有之而冷時々以向に階身禱を降し禍を降し、種々の奇異有之事の如くには無之候。云々」(天主教大意)といつて、神性に位格的働きを認めることを否み、能くまで、本体的原理的働きとしての又認めらるべきで、理性的に天上から人間を支配し禍福を降す等のことをする者を意味しないと主張しているが、中国古代思想にみられる敬天思想は果して、天もしくは、上帝を単なる理とだけ見たに過ぎなかつたであらうか、その帝という字義から考えても又、造物といふ主宰といふ表現から推しても、明に位格的存在として見られたと考えられる。が更に面白いことは白石自身、その別著「鬼神論」に於いては、「人死すハ其魂ハ必ズ天ニ歸リ其魂ハ必ズ地ニ歸ル、魂魄天地ニ歸ル云々」と記し、同時に



「古ノ先王制シ給ヒシ礼ニハ天下ヲ知シメサレテハ世ズカノ天神地祇人鬼ヲ祭ラセタマフ」といつているが、祭るといふ以上は、何等かの意味でその対象に位格的意味を認めずしては考えられない。尤も、白石の傾倒する宋儒思想による天<sup>ニ</sup>上帝は造化の理にすぎぬので、祭祀はその天に帰した人の鬼神を対象とするに過ぎぬかと思われるが、その一方で彼は天子など貴人の魂について「人費ケレバ其勢大ニシテ其魂強ク……其鬼、神明ニ至ルトナリ……聖子神孫七世ノ後ニ至ラセ給ハン程ハ彼<sup>カ</sup>天ニマズ神、上帝ノ御傍ニ左右セサセ給ヒヌベシ、（是天子ノ神靈、天ニマシテ天帝トナラビ玉フベキトノコトナリ）云々」と記してあり、鬼神も上帝も共に位格的存在として表現しており（白石全集才六「鬼神論」五頁）、天<sup>ニ</sup>上帝が古代中国で明に位格神としての性質に於て崇敬された觀念を踏襲している。

自然的宇宙の事実をそのまま忠実に認識し記載するものが形而下等の使命であるなら、その事実の根柢、原理を考究することが形而上等の任務である。その根柢を究極の理に求めると同時に、これに主宰の理としての性格をみとめる時、「自然神学」の域にふみ入るといえる。アリストテレスの才一哲学、即ち形而上等にこの理が認められている。換言すれば、人知は神を認めている、或は最高原理としての神性を求めているといえる。たゞ神

性として止らず、神格として認める時こそ真に神を認めるといえる。更に、その神意、神示についての認識と理解を、自然的理知の帰結としてでなく、啓示信仰に基いて追求するとき、積極的（超自然）神学といわれ、最後に、神への呼びかけ、神との交渉として実践されるに及んで始めて宗教といえる。即ち形而下等は世界の物的現象に反映する神の影を窺つめ、哲<sup>ニ</sup>形而上等は現象を越えて「存在根柢としての神とは何か」を追求し、その究極に在いて神を神格、即ち彼として認め、神学は彼として認めた神の言葉を信じて、その啓示の中に知識を求め、最後に宗教信仰の実践に在いて始めて汝、即ち主と見る神と相会するといひ得よう。元来位格（ペルソナ）とは知覚的実体を指す語とされるが、つまりそれは「彼」か「汝」か「我」かのいずれかを指す場合に外ならぬ。人面写る我は神なる汝に撰取され、彼としての神の裡に生きる神人合致の域に向うものといえるであろう。

たゞ神の位格性について餘りに神人同型説的に表現することは正しくないし、また自然的現象の認識をそのまま、延長して世界の原因を相対的な工作者としての神に帰結するのも不当である。むしろ自然的因果現象の彼方に、超自然的主体による超自然的根柢の存在すべき原理を透視すべきであり、実証知としては物的世界の偶然性可変性の事実認識に止め、その存在根柢が何処にあるべきか

については、形而上学的原理の追求に解答を求むべきだと  
思う。更に、形而上学的に推理された究極原因として  
の神の概念が、絶対的存在、乃至は無上に完全な実有と  
して考えとれるとすれば、すべての存在する実体中の最  
高の屬性として考えられる知性と意とをも、完全な形態  
に於て具有すべき筈であることが結論され、絶対無上の  
原理と認められる神を同時に最も優れた位格者としても  
認むべき結果となる。たゞ同じ位格の語をもって表すと  
はいえ、人格性と神格性とは全くその質を異にし、従つ  
て神の徳、愛、憎悪等の観念は、全く神学者の所謂、「  
有の類比的思考」(Analogia Entis)に在いて推察されるに  
すぎぬことが悟られる。この意味から神観念に位格性が付  
され得ることは、決して白石の言の様に形而下的の知識  
をそのまゝ延長して形而上的知識にもち込むものではな  
い。もし宇宙に絶対原因として自存の実体(ens a se)を  
認めず、或は無限の輪理的有として機械的自然のみを  
認め、物的自然をそのまゝ自存者と認めるとすれば、む  
しろそれこそ、形而下的知識をもってそのまゝ形而上的  
知識に代用するに等しいものといふべきではないか。若  
し相対的存在的世界の存在根拠としてそれにふさわしい  
絶対自存有を認めず、更にそれにふさわしい意味での最  
高の位格性をも否定するとすれば、自然的世界の存在に  
ついて、何等積極的な形而上学的認識を有し得ぬといふ

のと同意となり、近代唯物論者、実証論者達は、かくし  
て結局自らの哲学をも含めて「一切の哲学を否定しよう  
とする哲学」を主張する矛盾を犯すものといふも過言と  
思われない。

この意味で形而上学に於いて彼としての神が認められ、  
宗教信仰に於て汝としての神が観られ、汝なる神の裡に  
我を同化せめる過程に実践される有神論倫理、神人の支  
り或は奇蹟、神祕的生活の可能すら認められることは、  
決して形而上学的理論追求と矛盾しないものであること  
が肯定されねばならぬのであろう。

#### むすび

白石的批判は結局、西改近世の反中世紀的・反キリス  
ト教的・反有神論的思潮がたどつた足跡を、もう一度逆  
にたどつてみる餘地はないか、また果して純粋にキリス  
ト教的信仰を基礎付ける為の新しい形而上学的思想の樹  
立が可能か否か、についての向いかけであり、伝統的な  
通俗信仰者が教条暗記的形式保守を金科玉条として固執  
しながら、いつか安易な説明や受取方に墮して満足し  
るか、また、その反対側も、たゞそれに対する反感をの  
のらげ、教義説明の低劣化した点を、教義自体の本質的  
欠陥のように見て攻撃し、論点が核心を外れる嫌がみら  
れる現在、双方に反省点を供するために、東洋人独自の

見方から有意義な發言を呈したものとといえらると思ふ。

我々は「西歐の知識が形而下的範圍をめぐれなむに天地の如きもこれを造れる者あり」といふこと怪しむに足りず」といつた白石に對して、如何に答へべきかを卒直に反省考慮する要ありと警告せずにはいられない、と同時に近代唯物論的自然科學者に對して、もし云い得られるなら、かく云いたいと思ふ。即ち、「こゝにて知りぬ彼等の學の如きは唯だその形と器とに精しきことを、所謂形而下なるもののみを知りて形而上なるものはいまだ預りきかず、さらば、天地の如きもそのまゝ存在の根拠に考へ及ばずして、在りとなすこと怪しむにはたりず」と。

註

(一) 白石の西洋形而下學評については本誌37号拙論「西洋紀團の初稿断片の示唆する白石のキリシタン教義批判」中一九頁にも言及した。

(二) キリシタン布教時の信者の信仰理解については、文芸作品ではあるが遠藤周作氏作「沈黙」中にも氏一流の見解が見られる。当時の教会側の神學教科書等の具体的資料によつて、当時のキリスト教の知的受容について論及されたものとしては、昭和四十一年三月吉川弘文館刊、キリシタン文化研究会編「キリシタン研究才十一輯所載の井手簡美氏論文「キリ

シタン時代に於ける日本人のキリスト教受容」があり、好參考資料と思われる。

(三) 所謂本然學については、蘭學者達が明・清天主教書の影響をうけ、本然學の名の下に自然哲學的自然科学↓形而上學↓神學という一連の知識体系をつくり、次第にキリシタン邪宗觀念を後退していったことは注意すべきで、良沢の西洋に關する基礎知識が決して蘭學のみからでなく、中國布教のリッチ以下イエズス會士の著書によつてゐることは否めず、それにオランダ學的知識が加えられたので、管蠡秘言(管蠡秘言)の序にも「……而窮基本原固有之理、名曰、本然學。是以敬天尊神；而帝王布德教」とあり、窮理學(本然學 *Natural Science*)をあげてオランダ學を高く評価し、その自然哲學的証明により神を尊ぶことを記している。まさしく中世以來、神を証明するに當り自然哲學的証明によるのが普通で、キリシタンも明・清天主教もそうであつたといふことは海老沢有道教授、南蠻學統の研究(三三〇頁)にも指摘されている處である。「日本正史」才二四号に宮崎教授論究「新井白石と蘭學」中の佐藤昌介氏所論として「良沢が前掲書中に『管蠡秘言』邦、別ニ教化ノ學アリテ本然ノ學トハ其門ヲ異ニス」といつた点から、良沢の四元論は西洋學術をキリ

スト教から切離したの優秀性を承認するという白石の提起したとされる命題に対していはゞ原理的立場から答えたものと解せられる云々（序説八七頁）と述べられているが、前掲海老沢氏のあげられた良沢の序文の趣旨より考えても、良沢が「本然の学と教化の学と其門を異にす」と見たのは、決して両者を相対するものと見たのでなく、むしろ本然学よりして本然教、即ち教化の学に尊かれるものと見たことが明で、其故にこそ良沢は本然学から推してキリシタン邪宗觀念から次才に脱却したと考えられる。同じ自然科学的知識の価値を認識するについても、白石の行方は全く異り、自然的知識と教化の道とを區別するに当って白石は「……教法を説くシドナを愚者、天文地理に通じたシドナを智者と見た」とする宮崎氏の論旨が重視さるべきものとなる。白石は形而下学的知を賞揚するが、それを直接形而上学に連絡し得るものと収めないで、むしろ本然学的傾向を批判し、理論的には現代の史証主義的行方に賛同を示した者といえる。その点本然学からキリシタン邪教観を脱却した良沢等とは行き方を異にする。たゞ彼は、かくしてキリシタンを学的形而上的愚考に基づかぬ迷信と見て排しつゝも、彼等が政治的に固まることがうた逆思想を抱く者とか、魔法收術を修する者

とは兎なかつた点で、当時としてはキリシタン認識に重大な転換を示唆した偉大な啓蒙家であつたといわねばならぬ。のみならず彼のキリシタン批判、西洋形而上学批判は、本論に述べた如く現代思潮中において、キリスト教信仰、或はキリスト教的神哲學思想に対する理解、或は批判を試みる者にとつても、重要な暗示を与えるものとして見逃がし得ぬといふべきである。